

# Bernstein 型問題の研究の最近の進展について

川上 裕 (Yu KAWAKAMI)

金沢大学理工研究域数物科学系

2021 年 7 月 9 日 : 東京理科大学工学部数学科談話会

## 本講演の目的

グラフ曲面の Bernstein 型問題の最近の研究結果の紹介

- ①  $\mathbf{R}^3$  の極小グラフに対する Bernstein の定理の歴史
- ②  $\mathbf{R}^3$  の平均曲率一定 (CMC) グラフに対する Bernstein 型定理
- ③  $\mathbf{L}^3$  のグラフ曲面に対する Bernstein 型定理について

# 1. $\mathbf{R}^3$ の極小グラフに対する Bernstein の定理の歴史

$\Omega \subset \mathbf{R}^2$  領域

$X: \Omega \rightarrow \mathbf{R}^n$   $C^r$  級はめ込み ( $r \geq 2$ )

## Definition

曲面  $X(\Omega)$  の平均曲率が恒等的に 0 となるとき、その曲面を **極小曲面** (minimal surface) と呼ぶ。

非径数表示 (non-parametric form)

$$X(x, y) = (x, y, f_3(x, y), \dots, f_n(x, y)), \quad f_k(x, y) \in C^2(\Omega, \mathbf{R})$$

のとき、この曲面が極小曲面であるための条件は次のようになる：

$$\left(1 + \sum_{r=3}^n \left(\frac{\partial f_r}{\partial y}\right)^2\right) \frac{\partial^2 f_k}{\partial x^2} - 2 \sum_{r=3}^n \left(\frac{\partial f_r}{\partial x} \frac{\partial f_r}{\partial y}\right) \frac{\partial^2 f_k}{\partial x \partial y} + \left(1 + \sum_{r=3}^n \left(\frac{\partial f_r}{\partial x}\right)^2\right) \frac{\partial^2 f_k}{\partial y^2} = 0. \quad (1)$$

(1) を **極小曲面方程式系** (system of minimal surface equations) と呼ぶ。

# $\mathbf{R}^3$ における極小曲面方程式

$n = 3$  のとき,  $f_3(x, y)$  を  $\Phi(x, y)$  とすると, (1) は

$$(1 + \Phi_y^2)\Phi_{xx} - 2\Phi_x\Phi_y\Phi_{xy} + (1 + \Phi_x^2)\Phi_{yy} = 0 \quad (2)$$

と 2 階の非線形楕円型偏微分方程式となる.

**Note:** 極小曲面方程式 (2) は,  $\Phi$  の勾配  $\nabla\Phi := (\Phi_x, \Phi_y)$  を使って

$$\operatorname{div}\left(\frac{\nabla\Phi}{\sqrt{1 + |\nabla\Phi|^2}}\right) = \frac{\partial}{\partial x}\left(\frac{\Phi_x}{W}\right) + \frac{\partial}{\partial y}\left(\frac{\Phi_y}{W}\right) = 0 \quad (3)$$

( $W := \sqrt{1 + \Phi_x^2 + \Phi_y^2}$ ) と発散を用いた方程式で表すことができる.

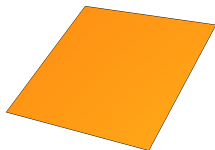
関数  $\Phi$  のグラフ

$$\Gamma_\Phi := \{(x, y, \Phi(x, y)) \in \mathbf{R}^3 \mid (x, y) \in \Omega\}$$

# 極小曲面方程式を満たす例

- 平面 (**plane**) (自明な例)

$$\Omega = \mathbf{R}^2, \Phi(x, y) = ax + by + c \quad (a, b, c \in \mathbf{R})$$



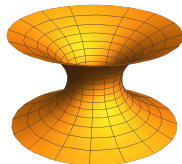
- 常螺旋面 (**helicoid**) (線織面かつ極小曲面となる唯一の例)

$$\Omega = \mathbf{R}^2 \setminus (0, 0), \Phi(x, y) = \arctan \frac{y}{x}$$



# 極小曲面方程式を満たす例と Bernstein の定理

- 懸垂面 (**catenoid**) (回転面かつ極小曲面となる唯一の例)  
 $\Omega = \mathbf{R}^2 \setminus \{(x, y) \mid x^2 + y^2 < 1\}$ ,  $\Phi(x, y) = \cosh^{-1} \sqrt{x^2 + y^2}$



## Theorem (Bernstein の定理)

$\mathbf{R}^2$  全体で定義される極小曲面の方程式 (2) の解は、  
自明な解 (ここでは,  $x, y$  の 1 次式のこと) のみである.

**Note:** 上の主張を幾何学的に述べると,  
“ $\mathbf{R}^2$  全体で定義される極小グラフは平面のみである” となる.

# S. N. Bernstein による証明について (1)

## Serge Natanovich Bernstein (1880~1968)

- パリ大学で学位取得. C. E. Picard に師事.
- 学位論文で, 楕円型偏微分方程式の問題である Hilbert の第 19 問題を解く (1904 年).
- 専門は楕円型偏微分方程式, 確率論, 構成的関数論.

## S. N. Bernstein による Bernstein の定理の論文

- S. Bernstein, Sur un théorème de géométrie et ses applications aux équations aux dérivées partielles du type elliptique, Comm. de la Soc. Math. de Kharkov (2éme sér.) **15**, 38–45 (1915–1917).
- S. Bernstein, Über ein geometrisches Theorem und seine Anwendung auf die partiellen Differentialgleichungen vom elliptischen Typus, Math. Z. **26** (1927), 551–558. (上の論文のドイツ語訳)

## S. N. Bernstein による証明について (2)

S. N. Bernstein は、以下の定理の系として Bernstein の定理を導いた。

### Theorem (Liouville の定理の一般化, Bernstein (1915))

関数  $a(x, y), b(x, y), c(x, y)$  が次の条件を満たすものとする：

$$\begin{pmatrix} a(x, y) & b(x, y) \\ b(x, y) & c(x, y) \end{pmatrix} \text{ が各 } (x, y) \in \mathbf{R}^2 \text{ で正定値である.}$$

関数  $f \in C^2(\mathbf{R}^2, \mathbf{R})$  を

$$\begin{cases} a(x, y)f_{xx} + 2b(x, y)f_{xy} + c(x, y)f_{yy} = 0 & \text{in } \mathbf{R}^2 \\ f(x, y) = o(\sqrt{x^2 + y^2}) & \text{as } \sqrt{x^2 + y^2} \rightarrow +\infty \end{cases} \quad (4)$$

の解とする。このとき、 $f$  は定数関数となる。

**Note:**  $a = c \equiv 1, b \equiv 0$  で  $f$  の有界性を仮定すれば、上の定理は調和関数に対する Liouville の定理となる。



## S. N. Bernstein による証明について (3)

先の定理を用いて, Bernstein の定理を証明する.

Proof.

極小曲面方程式 (2) の任意の解は実解析である. また, (2) から,

$$\varphi_1 = \arctan(\Phi_x), \quad \varphi_2 = \arctan(\Phi_y)$$

は次の偏微分方程式の  $\mathbf{R}^2$  上の有界な解となる :

$$(1 + (\Phi_y)^2)(\varphi_i)_{xx} - 2\Phi_x\Phi_y(\varphi_i)_{xy} + (1 + (\Phi_x)^2)(\varphi_i)_{yy} = 0 \quad (i = 1, 2).$$

そこで,

$$a(x, y) = 1 + (\Phi_y)^2, \quad b(x, y) = -\Phi_x\Phi_y, \quad c(x, y) = 1 + (\Phi_x)^2$$

として, 先の定理を適用することで,  $\nabla\Phi = (\Phi_x, \Phi_y)$  は定数である. (4) における無限遠の挙動の仮定から,  $\Phi$  は  $x, y$  の 1 次式となる. □

## S. N. Bernstein による証明について (4)

Liouville の定理の一般化の結果の証明は次の通りである：  
楕円型の条件 (4) から，

$$f_{xx}f_{yy} - f_{xy}^2 \leq 0 \quad \text{in } \mathbf{R}^2$$

で，等号が成り立つのは  $f_{xx} = f_{yy} = f_{xy} = 0$  となる点である。

Lemma (Bernstein (Gap 有) ; Hopf, Mickle (1950))

$f \in C^2(\mathbf{R}^2, \mathbf{R})$  とする。  $\mathbf{R}^2$  上で  $f_{xx}f_{yy} - f_{xy}^2 \leq 0$  (つまり  $\Gamma_f$  の Gauss 曲率  $K$  が  $K \leq 0$ ) で，  $\mathbf{R}^2$  のある点で  $f_{xx}f_{yy} - f_{xy}^2 < 0$  (つまり  $K < 0$ ) となるとき，  $f$  は “ $\sqrt{x^2 + y^2} \rightarrow +\infty$  のとき  $o(\sqrt{x^2 + y^2})$  となる” ことはない。

上の補題と条件 (4) から，  $\mathbf{R}^2$  上で  $f_{xx}f_{yy} - f_{xy}^2 \equiv 0$  となり，

$$f_{xx} = f_{yy} = f_{xy} = f_{yx} = 0$$

となるので，  $f$  は  $x, y$  の 1 次式となる。

さらに無限遠の条件から  $f$  は定数関数となる。 □

# Review : Cauchy の係数評価から Liouville の定理を導く

## Theorem (Cauchy の係数評価)

$\Delta_R = \{z \in \mathbf{C} \mid |z| < R\}$  原点中心半径  $R(> 0)$  の開円板  
複素関数  $f(z)$  が  $\Delta_R$  で正則 (*holomorphic*) かつ,  $|f(z)| \leq M$  ( $M$  は定数) となるとき

$$|f'(z)| \leq \frac{M}{R}$$

となる.

## Corollary (Liouville の定理)

$f(z)$  は  $\mathbf{C}$  で正則でかつ有界ならば, 定数関数である.

## Proof.

$R \rightarrow +\infty$  とすることで,  $\mathbf{C}$  で  $f' = 0$  となることがわかる.  
よって,  $f$  は定数関数である. □

# E. Heinz による証明について (1)

## Ref.

- E. Heinz, Über die Lösungen der Minimalflächengleichung (German), Nachr. Akad. Wiss. Göttingen. Math.-Phys. Kl. Math.-Phys.-Chem. Abt. 1952 (1952), 51–56.
- R. Osserman, A survey of minimal surfaces, Second edition, Dover Publications, Inc., 1986.
- W. Jäger, S. Friedrich, Professor Dr. Dr.h.c. Erhard Heinz (1924–2017) in memoriam (German), Jahresber. Dtsch. Math.-Ver. **122** (2020), 3–33.

## **Erhard Heinz (1924～2017)**

- ゲッティンゲン大学で学位し，在籍する． Franz Relich に師事．
- 専門は楕円型偏微分方程式，微分幾何学．

## E. Heinz による証明について (2)

### Theorem (Heinz, 1952)

$\Delta_R = \{(x, y) \in \mathbf{R}^2 \mid x^2 + y^2 < R^2\}$  原点中心半径  $R(> 0)$  の開円板  
 $\Delta_R$  上で定義される極小曲面

$$\Gamma_\Phi = \{(x, y, \Phi(x, y)) \mid (x, y) \in \Delta_R\}$$

のガウス曲率  $K$  に対して, ある正の定数  $C_0$  が存在して

$$|K| \leq \frac{C_0}{R^2}$$

が成り立つ.

- $R \rightarrow +\infty$  とすれば, Bernstein の定理が成り立つ.
- Heinz は  $C_0 = 4\pi^3/3$  で証明する. Finn と Ossermann (1964) により  $\pi^2/6 < C_0 < 6$  まで改良される.

# $\mathbf{R}^3$ の CMC グラフに対する Bernstein 型の定理 (1)

## Ref.

- E. Heinz, Über Flächen eindeutiger Projektion auf eine Ebene, deren Krümmungen durch Ungleichungen eingeschränkt sind. (German) Math. Ann. **129** (1955), 451–454.
- 剣持勝衛, 曲面論講義 平均曲率一定曲面入門, 培風館, 2000 年.

関数  $\Phi$  のグラフ  $\Gamma_\Phi := \{(x, y, \Phi(x, y)) \in \mathbf{R}^3 \mid (x, y) \in \Omega\}$  の平均曲率  $H$

$$H = \frac{1}{2} \operatorname{div} \left( \frac{\nabla \Phi}{\sqrt{1 + |\nabla \Phi|^2}} \right) = \frac{1}{2} \left\{ \frac{\partial}{\partial x} \left( \frac{\Phi_x}{W} \right) + \frac{\partial}{\partial y} \left( \frac{\Phi_y}{W} \right) \right\}$$

(ただし,  $W := \sqrt{1 + \Phi_x^2 + \Phi_y^2}$ ) と発散形で表すことができる.

## Corollary (CMC グラフに対する Bernstein 型定理)

$\mathbf{R}^2$  全体で定義される  $\mathbf{R}^3$  の平均曲率一定グラフは平面のみである.

# $\mathbf{R}^3$ の CMC グラフに対する Bernstein 型の定理 (2)

## Theorem (Heinz, 1955)

$\Delta_R = \{(x, y) \in \mathbf{R}^2 \mid x^2 + y^2 < R^2\}$  原点中心半径  $R(> 0)$  の開円板  $\Phi \in C^2(\Delta_R, \mathbf{R})$  で,  $\Gamma_\Phi$  の平均曲率  $H$  が, ある正の数  $\alpha$  に対して,  $\Delta_R$  上で

$$|H| \geq \alpha > 0$$

を満たすならば,

$$\alpha \leq \frac{1}{R}$$

が成り立つ.

## Proof.

Heinz の定理から,  $|H| \leq R^{-1}$  が成り立つので,  $R \rightarrow +\infty$  とすると  $H \equiv 0$  となり, Bernstein の定理から主張を得る. □

# Heinz の定理の証明

この定理の証明では幾何学と微積分学とが見事に融合している。

剣持勝衛「曲面の微分幾何」 in 「可視化の技術と現代幾何学」より

$0 < R_1 < R$  を満たす任意の  $R_1$  を取る。Green の定理より

$$\iint_{\Delta_R} 2H \, dx dy = \oint_{x^2+y^2=R_1^2} \left( -\frac{\Phi_y}{W} dx + \frac{\Phi_x}{W} dy \right).$$

必要ならば法ベクトルを取り換えることで  $H \geq \alpha > 0$  としてよい。

上式の左辺は (左辺)  $\geq 2\alpha\pi R_1^2$  を得る。

一方、右辺は Cauchy-Schwarz の定理より

$$\begin{aligned} \oint_{x^2+y^2=R_1^2} \left( -\frac{\Phi_y}{W} dx + \frac{\Phi_x}{W} dy \right) &\leq \oint_{x^2+y^2=R_1^2} \sqrt{\frac{|\nabla\Phi|^2}{1+|\nabla\Phi|^2}} (dx^2 + dy^2)^{1/2} \\ &\leq \oint_{x^2+y^2=R_1^2} (dx^2 + dy^2)^{1/2} = 2\pi R_1. \end{aligned}$$

よって、 $2\alpha\pi R_1^2 \leq 2\pi R_1$  が成り立つので、 $R_1 \rightarrow R$  で定理を得る。

□



## Part 2 : Lorentz-Minkowski 空間のグラフ曲面の話

$\mathbf{R}_1^3 = (\mathbf{R}^3, \langle \cdot, \cdot \rangle_L)$  : 3次元 Lorentz-Minkowski 空間

### Lorentz 計量

$(x_1, y_1, z_1), (x_2, y_2, z_2) \in \mathbf{R}^3$  に対し

$$\langle (x_1, y_1, z_1), (x_2, y_2, z_2) \rangle_L := x_1x_2 + y_1y_2 - z_1z_2.$$

### 空間的・時間的はめ込み

$\Omega \subset \mathbf{R}^2$  : 領域

はめ込み  $X: \Omega \rightarrow \mathbf{R}_1^3$  が

- **空間的** (space-like)  $\iff X$  による誘導計量が  $\Omega$  上で Riemann 計量
- **時間的** (time-like)  $\iff X$  による誘導計量が  $\Omega$  上で Lorentz 計量

# $\mathbf{R}_1^3$ の極大グラフ

## Definition

$X: \Omega \rightarrow \mathbf{R}_1^3: C^r$  級空間的はめ込み ( $r \geq 2$ )  
曲面  $X(\Omega)$  の平均曲率が恒等的に 0 となるとき,  
その曲面を **極大曲面** (maximal surface) と呼ぶ.

非径数表示 (non-parametric form)

$$X(x, y) = (x, y, \Psi(x, y)), \quad \Psi(x, y) \in C^2(\Omega, \mathbf{R}).$$

$X$  が空間的はめ込み  $\Leftrightarrow 1 - |\nabla\Psi|^2 > 0 \Leftrightarrow |\nabla\Psi| < 1$ .

$\mathbf{R}_1^3$  の空間的グラフ

$$\Gamma_\Psi = \{(x, y, \Psi(x, y)) \mid (x, y) \in \Omega\}$$

が極大曲面となる条件は

$$(1 - \Psi_y^2)\Psi_{xx} + 2\Psi_x\Psi_y\Psi_{xy} + (1 - \Psi_x^2)\Psi_{yy} = 0. \quad (5)$$

この方程式を **ZMC 方程式** と呼ぶ.

# Calabi-Bernstein の定理

## Ref.

- E. Calabi, Examples of Bernstein problem for some nonlinear equations, Proc Symp. Pure Appl. Math. 15, 223–230 (1968).
- S. Akamine, M. Umehara, K. Yamada, Improvement of the Bernstein-type theorem for space-like zero mean curvature graphs in Lorentz-Minkowski space using fluid mechanical duality, Proc. Amer. Math. Soc. Ser. B 7, 17–27 (2020) .

## Theorem (Calabi-Bernstein の定理)

$\Psi(x, y) \in C^2(\mathbf{R}^2, \mathbf{R})$  で,  $|\nabla\Psi| < 1$  かつ ZMC 方程式を満たすならば,  $\Psi$  は  $x, y$  の 1 次式である.

**Note :** 上の主張を幾何学的に述べると,  
“ $\mathbf{R}^2$  全体で定義される  $\mathbf{R}_1^3$  の極大グラフは空間的平面のみである” となる.

# Calabi 対応 (流体力学的双対性) (1)

$\Omega \subset \mathbf{R}^2$  : 単連結領域とする.

## Theorem (Calabi 対応 (流体力学的双対性))

- $\Phi \in C^2(\Omega, \mathbf{R})$  : 極小曲面の方程式 (2) を満たす.  
このとき, 定数の差を除いて定まる  $\Psi \in C^2(\Omega, \mathbf{R})$  で

$$\begin{pmatrix} \Psi_x \\ \Psi_y \end{pmatrix} = \frac{1}{\sqrt{1 + \Phi_x^2 + \Phi_y^2}} \begin{pmatrix} -\Phi_y \\ \Phi_x \end{pmatrix}$$

かつ, ZMC 方程式 (5) と  $|\nabla\Psi| < 1$  を満たすものが存在する.

- $\Psi \in C^2(\Omega, \mathbf{R})$  : ZMC 方程式 (5) と  $|\nabla\Psi| < 1$  を満たす.  
このとき, 定数の差を除いて定まる  $\Phi \in C^2(\Omega, \mathbf{R})$  で

$$\begin{pmatrix} \Phi_x \\ \Phi_y \end{pmatrix} = \frac{1}{\sqrt{1 - \Psi_x^2 - \Psi_y^2}} \begin{pmatrix} \Psi_y \\ -\Psi_x \end{pmatrix}$$

かつ, 極小曲面方程式 (2) を満たすものが存在する.

これらの対応は, 一方が他方の逆対応を与える.

## Calabi 対応（流体力学的双対性）（2）

### Calabi-Benstein の定理の証明

$\Psi$  に対して，Calabi 対応から極小曲面の方程式を満たす  $\Phi \in C^2(\mathbf{R}^2, \mathbf{R})$  が存在する．極小曲面の Bernstein の定理から  $\Phi$  は  $x, y$  の 1 次式となるので，Calabi 対応から  $\nabla \Psi$  は定数となる．よって，主張が示せる．

**Note :** Bers による Calabi 対応の流体力学的意味付け

Chaplygin 流体を考えたとき， $\Phi$  が速度ポテンシャルに対し， $\Psi$  は流れ関数が対応する．このことから，Calabi 対応は「流体力学的双対性」とも呼ばれている（Akamine-Umehara-Yamada, 2020）

# Calabi 対応 (流体力学的双対性) (3)

## Calabi 対応の証明

$\Phi$  が極小曲面方程式を満たすことから

$$\operatorname{div}\left(\frac{\nabla\Phi}{\sqrt{1+|\nabla\Phi|^2}}\right) = \frac{\partial}{\partial x}\left(\frac{\Phi_x}{\sqrt{1+\Phi_x^2+\Phi_y^2}}\right) + \frac{\partial}{\partial y}\left(\frac{\Phi_y}{\sqrt{1+\Phi_x^2+\Phi_y^2}}\right) = 0$$

が成り立つ。これは 1 次微分形式

$$\omega = -\frac{\Phi_y}{\sqrt{1+\Phi_x^2+\Phi_y^2}} dx + \frac{\Phi_x}{\sqrt{1+\Phi_x^2+\Phi_y^2}} dy$$

が閉形式であることと同値である。

Poincaré の補題から、 $d\Psi = \omega$  となる  $\Psi \in C^2(\Omega, \mathbf{R})$  が存在する。  
 $\Psi$  が ZMC 方程式 (5) と  $|\nabla\Psi| < 1$  を満たすことが容易にわかる。

□

# $\mathbf{R}_1^3$ の空間的 CMC グラフ

## Ref.

A. Honda, Y. Kawakami, M. Koiso, S. Tori, Heinz-type mean curvature estimates in Lorentz-Minkowski space, to appear in Revista Matemática Complutense, Open Access.

空間的グラフ  $\Gamma_\Psi := \{(x, y, \Psi(x, y)) \in \mathbf{R}_1^3 \mid (x, y) \in \Omega\}$  の平均曲率  $H$

$$H = \frac{1}{2} \operatorname{div} \left( \frac{\nabla \Psi}{\sqrt{1 - |\nabla \Psi|^2}} \right) = \frac{1}{2} \left\{ \frac{\partial}{\partial x} \left( \frac{\Psi_x}{W} \right) + \frac{\partial}{\partial y} \left( \frac{\Psi_y}{W} \right) \right\}$$

(ただし,  $W := \sqrt{1 - |\nabla \Psi|^2} = \sqrt{1 - \Psi_x^2 - \Psi_y^2}$ ) と発散形で書ける.

$\mathbf{R}_1^3$  の平均曲率一定グラフに対しては,

**Bernstein の定理の主張はそのままでは成り立たない.**

実際, 後で述べる「双曲面 (hyperbola)」など反例が存在する.

## Theorem (Honda-K-Koiso-Tori, 2021)

$\Delta_R \subset \mathbf{R}^2$  : 原点中心半径  $R$  の開円板,  $\Psi \in C^2(\Delta_R, \mathbf{R})$ .  
このとき,

$$\frac{|\nabla\Psi|}{\sqrt{1-|\nabla\Psi|^2}} \leq M(x^2 + y^2)^k \quad (6)$$

となる  $M > 0$  と  $k \in \mathbf{R}$  が存在し,  $\Gamma_\Psi$  が空間的であるとする.  
 $\Gamma_\Psi$  の平均曲率  $H$  が, ある正の数  $\alpha$  に対して,  $\Delta_R$  上で

$$|H| \geq \alpha > 0$$

を満たすならば,

$$\alpha \leq MR^{2k-1}$$

が成り立つ.



# Heinz 型の平均曲率の評価の証明について

$0 < R_1 < R$  を満たす任意の  $R_1$  を取る. Green の定理より

$$\iint_{\Delta_R} 2H \, dx dy = \oint_{x^2+y^2=R_1^2} \left( -\frac{\Psi_y}{W} dx + \frac{\Psi_x}{W} dy \right).$$

必要ならば法ベクトルを取り換えることで  $H \geq \alpha > 0$  としてよい.  
上式の左辺は (左辺)  $\geq 2\alpha\pi R_1^2$  を得る.

一方, 右辺は (6) と Cauchy-Schwarz の定理より

$$\begin{aligned} \oint_{x^2+y^2=R_1^2} \left( -\frac{\Psi_y}{W} dx + \frac{\Psi_x}{W} dy \right) &\leq \oint_{x^2+y^2=R_1^2} \frac{|\nabla\Psi|}{\sqrt{1-|\nabla\Psi|^2}} (dx^2 + dy^2)^{1/2} \\ &\leq MR_1^{2k} \oint_{x^2+y^2=R_1^2} (dx^2 + dy^2)^{1/2} \\ &= 2\pi R_1^{2k+1}. \end{aligned}$$

よって,  $2\alpha\pi R_1^2 \leq 2R_1^{2k+1}$  が成り立つので,  $R_1 \rightarrow R$  で定理を得る.

□

# 平面上のグラフ曲面の平均曲率の消滅定理

## Corollary (Honda-K-Koiso-Tori, 2021)

平面  $\mathbf{R}^2$  上で定義された  $C^2$  級関数  $\Psi(x, y)$  のグラフ  $\Gamma_\Psi$  が空間的で、 $\Gamma_\Psi$  の平均曲率が一定であるとする。  $\mathbf{R}^2$  上で

$$\frac{|\nabla\Psi|}{\sqrt{1-|\nabla\Psi|^2}} \leq M(x^2 + y^2)^{(1/2)-\varepsilon}$$

を満たす  $M > 0$  と  $\varepsilon > 0$  が存在するとき、 $\Gamma_\Psi$  の平均曲率は 0 となる。

## Proof.

Heinz 型の平均曲率の評価の結果から、 $\Delta_R$  上で  $\Gamma_\Psi$  の平均曲率  $H$  は  $|H| \leq M/R^{2\varepsilon}$  を満たす。  $R \rightarrow \infty$  とすることで  $H \equiv 0$  を得る。  $\square$

# 勾配条件の幾何学的解釈

グラフ曲面  $\Gamma_\Psi$  が空間的であるとき,

$$\nu(= \nu(x, y)) = \frac{1}{\sqrt{1 - |\nabla\Psi|^2}}(\Psi_x, \Psi_y, 1)$$

は  $\Gamma_\Psi$  の時間的単位法ベクトル場となる.

$e_3 = (0, 0, 1) \in \mathbf{R}_1^3$  も時間的ベクトルとなるので,

$$\langle \nu, e_3 \rangle_L = -\cosh \theta$$

を満たす非負値関数  $\theta(= \theta(x, y)) \geq 0$  が一意的に定まる.

この  $\theta$  を,  $\nu$  と  $e_3$  の間の**双曲的角度** (hyperbolic angle) という.  
このとき

$$\sinh \theta = \frac{|\nabla\Psi|}{\sqrt{1 - |\nabla\Psi|^2}}$$

が成り立つ.

# CMC グラフに対する Bernstein 型定理

## Theorem (Honda-K-Koiso-Tori, 2021)

平面  $\mathbf{R}^2$  上で定義された空間的グラフ  $\Gamma_\Psi$  の平均曲率が一定で、 $\nu$  と  $e_3$  の間の双曲的角度  $\theta$  に対して、 $\mathbf{R}^2$  上で

$$\sinh \theta \leq M(x^2 + y^2)^{(1/2)-\varepsilon} \quad (*)$$

となる  $M > 0$  と  $\varepsilon > 0$  が存在するとき、 $\Gamma_\Psi$  は空間的平面となる。

## Proof.

先の系（消滅定理）と双曲的角度の性質から、仮定を満たせば平均曲率は 0 となる。

よって、Calabi-Bernstein の定理から結果が従う。 □

# Bernstein 型定理の最良性

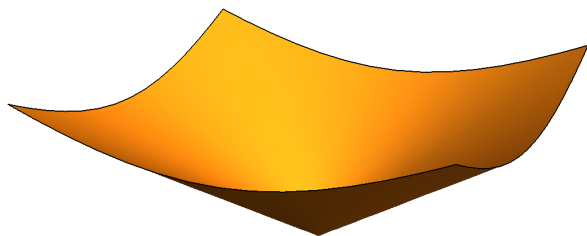
先の系の結果は最良 (optimal) である. 実際,

$$\Psi(x, y) = \sqrt{x^2 + y^2 + \frac{1}{H^2}} \quad (H > 0)$$

のグラフ曲面となる双曲面 (hyperboloid) は,  
 $\mathbf{R}^2$  上で定義される平均曲率一定 ( $H$  となる) グラフで,

$$\sinh \theta = H(x^2 + y^2)^{1/2}$$

つまり, (\*) の  $\varepsilon = 0$  の場合となる.



- $\mathbf{R}^3$  の極小グラフに対する Bernstein の定理の証明は色々と知られており、その根底にあるのは Liouville の定理との対応である。
- $\mathbf{R}^3$  の CMC グラフに対する Bernstein 型定理は、Heinz の平均曲率の評価から導くことができる。
- Calabi-Bernstein の定理は、 $\mathbf{R}^3$  の極小グラフと  $\mathbf{R}_1^3$  の極大グラフの対応から示すことができる。
- $\mathbf{R}_1^3$  の空間的グラフ曲面に対して、関数のある種の勾配評価を仮定することで、Heinz 型の平均曲率の評価が成り立ち、その系として、 $\mathbf{R}^2$  上の CMC グラフの Bernstein 型定理を得ることができる。またその結果は最良である。